

北のとびら

vol. 109

平成28年7月



特集

劇作家・演出家 藤田貴大インタビュー

ワークショップで伝える

「マームとジプシー」のゼロ地点

この人に注目

佐竹真紀

アートのチカラを考える

北海道のオール・ブリュット

街歩きアート

森と木の楽園から、

暮らしに根ざしたものづくりを発信

「津別町」

エッセイ

穂村弘

表紙作家の紹介

武田志麻



ワークショップで伝える 「マームとジプシー」のゼロ地点



シーンやセリフを反復させる「リフレイン」や視点を切り替えて見せる映画的手法などで、演劇の新しい領域を切り拓いている劇作家・演出家の藤田貴大さん。漫画や小説など他ジャンルとも積極的にコラボレーションを行い、2ヶ月に1本の驚異的なペースで作品を発表し続けています。

平成28年6月8日から2日間に渡って札幌で実施したワークショップの中で、藤田さんが伝えようとしたこと、試みたことについてうかがいました。

——主宰する「マームとジプシー」(以下、マーム)の活動は、北海道ではこれまでに故郷の伊達市で二度公演が行われました。札幌での活動は、藤田さんにとっては今回のワークショップが初めてとなります。

僕は10歳から伊達市の市民劇団に参加して、高校では演劇部で活動しました。北海道で演劇活動をしていたのは、東京の大学に進学するまでの10年間。今は31歳ですが、東京で演劇をやってきた時間のほうが長いんだな、と今回北海道に向かう飛行機の中で考えていました。

僕は北海道で演劇活動をするのを選ばなかった人間だという思いがあります。18歳以降は、日本の演劇シーンの中心である東京で、演劇というジャンルの中の激しい競争を経験し、演劇で食べていけるかどうかというのと戦ってきました。伊達市という田舎で育ったからかもしれないませんが、地方にはないスピード感の中で活動してきたと感じています。それがどのような意味を持つのか。北海道でやっていた記憶と今やっていること、今回はそれをす

り合わせて考える最初の機会でもあると考えて、楽しみにしてきました。

——ワークショップでは、空間全体を捉えて自分のポジションを動かしていくゲームなどを行った後、参加者それぞれに「朝、最初に会話した場面」を披露してもらい、最終的にはそれらのシーンを繋げて一つの作品として発表しました。

このワークショップの中には、作品づくりのゼロ地点として僕が俳優に求めていることや、僕の演劇づくりのベースとなるものをちりばめています。もう6年くらい同じ方法でのワークショップを各地で行ってきました。

マームの作品ではリフレイン(セリフやシーンの反復によって内在するものを増幅させたり変化させたりしていく手法)や、視点や場面を俳優の身体のみで切り替えて行くやり方を用いています。これらは僕が考えるだけでなく、俳優自身が空間や全体の呼吸感を考えて動くからこそ完成させることができるのです。





※平成28年6月8日・9日開催の「藤田貴大 ワークショップ in札幌」は、北海道文化財団の主催事業として実施しました。



藤田 貴大 (ふじたたかひろ)
マームとジブシー主宰・
劇作家・演出家

1985年生まれ、北海道伊達市出身。桜美林大学文学部総合文化学科にて演劇を専攻。2007年に「マームとジブシー」を旗揚げし、以降全作品の作・演出を担当して演劇作品を発表。2011年以降はさまざまな分野の作家とのコラボレーションを積極的に行う。2011年に三連作「かえりの合図、まっただ食卓、そこ、きつと、しおふる世界。」で第56回岸田國士戯曲賞を26歳で受賞。2014年に横浜市文化・芸術奨励賞を受賞。共作漫画、短編小説、エッセイなど、演劇以外の分野でも幅広く活動。

公演予定

◎マームとジブシー『0123』
日程：7月23日(土)～8月4日(木)
会場：元・立誠小学校/京都府京都市

◎ワークショップ公演
『ドコカ遠クノ、ソレヨリ向コウ
或いは、泡ニナル、風景』
日程：8月25日(木)～28日(日)
会場：彩の国さいたま芸術劇場 NINAGAWA STUDIO (大稽古場)
/埼玉県さいたま市

◎マームとジブシー
『クラゲノココロ』『モモノパノラマ』『ヒダリメノヒダ』
日程：9月16日(金)～19日(月・祝)
会場：彩の国さいたま芸術劇場 NINAGAWA STUDIO (大稽古場)
/埼玉県さいたま市

ワークショップの中で「立ち位置」と「配置」の話をしましたが、立ち位置という言葉には、俳優が決められたポジションでアクションするイメージがあります。僕は俳優自身が空間全体を捉え、主体的に自分を配置していくことを望んでいますし、そうでなくてはマームの作品は作れません。このような考え方を良しとしない演出家もいるでしょうが、多くの俳優が舞台空間で自分を主体的に配置し、それがどの



ようなレイヤー(層)になっているかを考えるようになれば、僕は10年後の演劇が変わってくると思っています。
マームのメンバーとは10年近く一緒にやっているため、このようなことを改めて言葉にして伝えることはありません。なので、僕自身のやり方を言語化して伝える場であるワークショップは、マームのゼロ地点を再確認する場となっています。

——マスキングテープで床に地図を描き、それぞれが場所を示して朝の会話の風景やエピソードを披露しました。

スペースに地図を描いて作品を作っていく、土地を二次元化して俯瞰して見たところから物語を立ち上げていく手法は、僕の作品づくりの原点の一つです。人の物語、つまり演劇的なものというのは、それだけが浮き上がって存在するのではなく、土地、フィールド、そこにシチュエーションがあつて初めて存在するものだと思っています。

物語を描こうとするとき、例えば作家によっては小説や映画からリサーチする人もいますが、僕は実践型で、人から直に聞いた話と自分のエピソードから作品を作ります。ワークショップでは、初めて出会う人たちと関わる事ができ、披露してもらったエピソードからその街での生活、人と人との関わり方、土地のありようなど、多くのことを発見できる。「ワークショップの講師をやる消耗する」という人もいますが、僕はいつも楽しんでいきます。また、地震や戦争など

——今年からは2017年札幌国際芸術祭(SIAF)のプロジェクトに講師として参加されています。今後の北海道との関わりをどのように考えていますか。

北海道で演劇をやっていた17歳の頃、演劇雑誌を読んで、東京に住む人と同じように演劇を観ることができない環境を悔しく思っていました。だから今の僕の役割は、東京で新しいと評価された作品やその手法を地方に持つていくことだと思っています。

今回のワークショップでは、北海



の大きなテーマを持った作品を作るときでも、朝の会話の風景のような小さなものを忘れたくない、それが大切だと思っています。

ワークショップの参加者には、会話(ダイアログ)と独白(モノローグ)のバランス、線を一本引くだけで、大掛かりなパネルや写実的な舞台美術がなくてもさまざまな空間を想像できる素舞台の可能性、そういったものの一端を伝えられたらと思っています。

道で今、演劇に関わっている若者の中にも、あのときの僕と同じ悔しさがあると確認できた。その人たちのために、僕はどんなことでもやってあげたいですね。

作り手として、作品はきちんと地方に届くように拡散させるべきだと考えています。逆に言えば、地方まで届かないものはダメだろうな、と。あらゆる地方が等価になるように拡散させたいと思っているけれど、やはり故郷である北海道には特別の思いがある。ここにきちんと良い作品が届くような活動を行っていきたいと考えています。

佐竹 真紀

Maki Satake



「おもかげ」



「暮らしあと」



「TOYOKORO」

多くの人が気軽に撮影する家族や友人、自分自身。楽しい場面やなにげない日常のひとつ、驚きや感動の瞬間。このような、個人の人生の「記録」として撮影された写真に関心を持ち、写真アニメーションという手法で脳内の「記憶」を再構築・視覚化する作品を作っているのが、札幌在住のアーティスト・佐竹真紀さんです。

写真アニメーションとは、連続的に撮影した写真を用い、順番を入れ換えるなどして再編集する映像の手法。佐竹さんの代表的な作品の一つ『おもかげ』では、故郷・豊頃町の現在の風景の中に、写真家である祖父が撮影した過去の風景や家族の写真を重ね、数百枚を繋いで6分間の映像作品に仕上げられています。作品『暮らしあと』は、人が去った祖父母の家の風景に、かつての家族の交流のひとつときの写真や映像、音声を組み合わせたもの。作品『TOYOKORO』は、故郷の風景に家族の写真や過去の作品などを組み合わせています。

2016年3月、佐竹さんは国際的な活躍が期待される若手作家を発掘・支援する「VOCA展」(上野の森美術館)に参加。家族の肖像をモチーフにした映像作品『肖像記』で佳作を受賞しました。「断片的に思い出される、どこか完璧ではない記憶の中の世界を表現していきたい」と語る佐竹さんは、映像表現の分野で注目されている若手アーティストの一人です。

佐竹 真紀 / Maki Satake

1980年豊頃町生まれ。札幌市在住。2003年北海道教育大学札幌校芸術文化課程美術コース卒業。2005年北海道教育大学大学院修了。写真を使ったアニメーションを中心に制作。“記録”と“記憶”の狭間にある世界を探究している。上野の森美術館「VOCA展 2016」佳作賞、ドイツ・シュトゥットガルト「25. Stuttgarter Filmwinter」最高賞 Norman 2012など、国内外での受賞多数。

アートの子カラを考える⑧

北海道のアール・ブリュット

r

「アール・ブリュット」は、伝統や流行、教育などの既存の価値観にとられない、純粋な創造衝動から生まれた芸術を指す概念です。作り手は障がい者が主となっていますが、障がい者の生きがいや生活の質を向上させる行為としてではなく、「芸術作品としての質」に価値を置きます。

アール・ブリュットへの関心は世界的に高まっており、2013年にはヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展でアール・ブリュット作品が大きな注目を集めました。日本でも、ボーダーレス・アート・ミュージアムNOMMA(滋賀県)をはじめアール・ブリュットの美術館が次々に誕生。見出された作品は海外での展示の機会を得、特に2010年にパリの美術館で行われた「アール・ブリュット・ジャポネ」展では、日本の作家の個性が世界的に大きな存在感を示しました。

このような流れの中で、北海道におけるアール・ブリュットの作り手と作品を見出す動きが行っているのが、北海道アール・ブリュットネットワーク協議会(以下、北海道アール・ブリュット)です。厚生労働省の「障害者の芸術活動支援モデル事業」を受けて昨年発足したこの組織は、社会福祉法人ゆうゆう(当別町)を事務局に当麻かたるへの森(当麻町)を道北エリアの拠点として、障がい福祉、芸術、精神医療などの団体や、大学、自治体などと連携。障がい者の芸術活動の実態や課題などをアンケートで調査し、昨年度は約300の施設から回答を得ました。これによって集まった情報を元に、事務局スタッフと芸術の専門家のペアが全道21市町村86名の作家を訪問調査して、作品を質



蝦子陽太 / とむへの森 (北見市)
455x530mm
「黄色い犬」キャンバスにアクリル 2015



吉田幸敏 / かたるへの森美術館 (当麻町)
382x542mm
「題名なし」紙にクレパス 2011



2016年3月に札幌で開催された「北海道アール・ブリュット展 ～ここところの交差点～」の展示風景

の面からも評価する動きを行っています。さらに、作品展を全道5カ所で実施したほか、創作活動の支援や企画展示に携わる人材育成のための研修、大学との連携によるフォーラムなども実施してきました。

「障がい者がいちアーティストとして評価されるボーダーレスな社会を目指したい」と、北海道アール・ブリュットの代表・大原裕介さん。今年度も調査・訪問を継続し、秋以降での作品の巡回展や岩見沢市でのフォーラムの開催を予定しているといいます。

「東京オリピック・パラリンピックに併せて開催される文化事業の一つとして、アール・ブリュットにも期待が寄せられています。私たちは同時期に岩見沢市で、自治体や大学と連携し、地域づくりに繋がる地方ならではの取り組みを立ち上げていきたい」。その中で、大学で美術や医療福祉を学ぶ学生との交流も図りたいとのこと。アール・ブリュットを核に、障がい者を理解し受け入れる社会に向けた次世代へのアプローチを広げていきます。

北海道アール・ブリュットネットワーク協議会の活動予定

◎北海道アール・ブリュットフォーラム
日程 / 11月12日～13日
場所 / 岩見沢市生涯学習センターいわなび、北海道教育大学岩見沢校などを予定
◎作品展(巡回展)
日程 / 10月、12月
場所 / 帯広、岩見沢、札幌、函館など

問い合わせ / 01133222896
(北海道アール・ブリュットネットワーク協議会事務局 シェントリ)

デザインのカと木工技術で美しい椅子を

ISU-WORKS (山と木工)

創業60年以上の木工所・山上木工と、木工家・高橋三太郎さんの協働プロジェクトとして誕生した椅子のブランド「ISU-WORKS(イスワークス)」。

2011年のスタート以来、全国のショップで扱われ、今では年間約800脚を製造するほどの人気です。津別町には昔から木工所が多くありました。「このあたりでは、商品といえば製材や建築備品としての建具で、家具を商品として作っているところはなかったんです。三太郎さんに出会ったこともあり、人がやらないことをやってみよう!」と思いましたが、社長の山上裕祐さん。木材の産地から、作り手自身がブランドを発信することが重要、と話します。

それができるのも、この木工所には木工加工の機械がほぼ揃っているからです。通常は大規模工場にあるような特殊加工ができる工作機械や、3Dでの加工機械も導入し、建具製造で培ってきた抜群の「機械力」を持っています。同時に、腕の良い木工職人を揃え、質の高い作業ができる「職人力」も自慢です。ISU-WORKSは、山上さんが三太郎さんと目指した「職人力と機械力のコラボレーション」の実現でもあります。

シャープなフォルムとモダンなデザイン、そして座ったときの心地よさ。ISU-WORKSの椅子作りは、「見えない裏側まで完全に仕上げる」という三太郎さんのポリシーのもと、真の美しさを追求しています。2015年からは、廃校の小学校を製作工房に活用するプロジェクトがスタート。ショールームやショップ、カフェも設けられる予定で、木工芸の新しい拠点となりそうです。



高橋三太郎デザイン、山上木工製造で座面も自社製。全16種類



機械で切り出したパーツへ命を吹き込むのは職人の手



木工所には約100台の機械が揃う。近年は金属加工の技術も応用

●網走郡津別町字達美147-6
☎0152-76-4934
yamagamimokko.co.jp
※「つべつ木工芸館」(津別町字共和127)で展示販売

Column

鉄道と開拓の歴史が育んだ木工技術

経木(きょうぎ)

木を薄く削り出したものを経木(きょうぎ)といい、古代では紙のように文字を書くものでした。江戸時代ごろからは容器が作られるようになり、現在に至ります。

北海道と経木の関係は、明治時代に始まります。東京ー大阪間に鉄道が敷かれると駅弁が売られ、その容器として経木の需要が増加。そこで注目されたのが、北海道に豊富にあったエゾマツです。「節が少なく木目が美しく、抗菌作用も高い。エゾマツは経木の王様といわれています」と、加

賀谷木材社長の加賀谷雅治さん。オホーツク管内が経木の中心地で製材業より古く、津別町では昭和30年代に盛んでした。原料の阿寒山麓のエゾマツは、ほかの地域のものより白いのがウリだったとか。しかし、現在工場はここを入れて町内で2軒のみ。全道でも4軒しか残っていません。

加賀谷木材では、経木を知ってもらうため、30年前から経木を取り入れた木工キットを製作。また、有名駅弁の容器の底や築地魚河岸の値札など、経木にこだわりを持つ業種の需要に応えています。歴史ある木工技術は、今もまちに息づいています。



経節を削るように1ミリ厚(厚経木)にし、選別後、2枚ずつ貼り合わせ容器に加工



設備の整った室内で乾燥させるのは、加賀谷木材独自の方法



経木アートシリーズやあかりシリーズなど、自分で組み立てる木工キットも多数開発

●加賀谷木材(網走郡津別町緑町22 ☎0152-76-2145)
www.kagayamokuzai.jp ※工作キットの販売あり

街歩きアート

森と木の楽園から、暮らしに根ざしたものづくりを発信

【津別町】

オホーツク地方内陸の深い森に囲まれたまち・津別町。その豊富な森林資源から林業が発展し、製材所や木工所が多く造られました。今も、樹齢千年以上のミズナラの大木を見ることができます。開拓期から木材加工で培ってきた技術は、家具などクラフトの分野で生かされ、また、深い森は新しい芸術の表現が生まれる場所となっています。



カラダで感じる!アートの極楽浄土

シゲちゃんランド

津別町出身の立体作家・大西重成さん(愛称シゲちゃん)が、2001年に開設した私設美術館。館といっても、複数の展示施設が集まる大きな庭のようになっています。入り口に置かれたオブジェのタワーが、怪しくも楽しそうな世界が奥に広がっていることを予感させます。

ゲートをくぐると、真っ赤な展示場(ハウス)がずらり。ひとつひとつが「ノーズハウス」「アイハウス」など、身体の名前が付いているのもユニークです。「ランド全体でひとつの生き物みたいに見えれば」と大西さん。各ハウスでは、流木や木の根、動物の骨、使用済みのコルク、古い浮き球などに新たな命が吹き込まれ、役割を終えたモノから「生きモノ」へ生まれ変わった彼らがじっと見つめ返します。ポップでユーモラスながら、生と死のサイクルを想像させるような神聖さが漂う独特の表現が印象的です。

イラストレーターとして第一線で活躍していた大西さん



館主のシゲちゃん。椅子は流木で製作した家具「ARM」のシリーズ



津別町の銘菓「クマヤキ」は、大西さんによるデザイン

が、立体表現へと移行し、東京から故郷に移り住んだのが20年前のこと。「自分がどこまで「創る、人間でいられるか、本当に「創る、側の人間なのかを確かめたい、という挑戦でもありました」と話します。自然がむき出しの環境の中で、生や死を身体で感じた作品が生まれ、自ずと世界の先住民族の文化に興味を抱きました。そして今の状況に「足りないものが分かってきた」と言います。

大西さんは現在「ネオフォーク」をコンセプトに、新しいものづくりを発信するコミュニティを構想しています。「アート、クラフトのほか食や音楽なども含め、この土地での暮らしからモノを創る、カオスのような場」を目指しているとか。これまで例のないアートシーンが生まれる予感です。



「ヘッドハウス」は東京時代の作品が中心。ポップでハッピーな気持ちになる



骨のオブジェが飾られた「ボーンハウス」は、まるで祭壇のような雰囲気



木の根を生き物に見立てたオブジェは、「ノーズハウス」と「アイハウス」で展示

●網走郡津別町字相生256
☎090-5222-8580
開館時間 10:00~17:00
開館期間 5月1日~10月末日
休館日 水・木・金(祝日は開館)
入場料 小学生以上700円(幼稚園児以下無料)
www.9.plala.or.jp/wl-garden/shigechanland/

表紙作家の紹介



リンゴスター
撮影：前澤良彰

武田 志麻 版画家

Shima Takeda

宮城県仙台市生まれ。赤井川村在住。実践女子大学生活科学部生活文化学科卒業。大学在学中セツ・モードセミナー美術科在籍。同大学副手室勤務後、制作活動に入る。日本美術家連盟会員。

[主な個展・グループ展]

- 2005年 11月 個展「cafe caldie」(カフェ・カルディ/柏)
- 2012年 3月 個展「武田志麻 版画展」(ギャラリーレトラ/札幌)
- 9月 Print Essence 版画6人展(アートホール東洲館/深川)
- 11月 全道展新鋭展出品(大同ギャラリー/札幌)
- 2013年 2月 個展「らいらつく新鋭展 武田志麻展」(らいらつく・ぎやらりい/札幌)
- 4月 個展「mori-zumu 森のリズム」(カフェ リン フォレスト/赤井川)
- 2014年 2月 くっちゃんART2014出品、以降毎年出品(小川原脩記念美術館/倶知安)
- 10月 個展「武田志麻 版画展」(アートホール東洲館/深川)
- 鹿沼市立川上澄生美術館木版画大賞東京展(INOAC銀座並木通りギャラリー/東京)
- 2015年 4月 個展「武田志麻版画展 雲海のシンフォニー」(小川原脩記念美術館/倶知安)
- 2016年 1月 札幌美術館「モーション/エモーション-活性の都市-」出品(札幌芸術の森美術館/札幌)

[受賞歴]

- 2012年 6月 全道展佳作賞
- 2014年 3月 鹿沼市立川上澄生美術館木版画大賞審査委員特別賞
- 6月 全道展北海道新聞社賞

[その他の活動]

- 2010年 NPO赤井川観光協会カレンダー作成
- 2011年 NPO赤井川観光協会ポストカード作成
(『日本で最も美しい村』連合会議開催記念事業)

◎北海道文化財団アトスペース企画展 vol.30

版木画「はんもくが」展 武田志麻
会期:平成28年9月1日(木)~11月18日(金) 9:00~17:00
休館日:土・日・祝日 ※都合により臨時休館する場合があります。
会場:北海道文化財団アトスペース
(札幌市中央区大通5丁目11 大五ビル3F)
入場料:無料



あかい川



美しい村



絵 / 岡理恵子

再 会

北大の時、同級生のY君と一緒に住んでいた。今でいうところのルームシェアである。北16条のマンションには部屋が三つあって家賃は四万八千円、つまり一人頭二万四千円だった。ほんの一年ほどの時間だったけど、二人で珈琲を飲みながら話したり、夜中にふらふら散歩したり、とても楽しかった。でも、私が大学を中退して札幌を離れたために、音信不通になってしまった。噂によると、Y君は地元の福井で就職したらしい。

二十数年後、私たちは再会することができた。ちょっとした偶然とインターネットのおかげである。早速会おうということになって、Y君の出張に合わせて、都内のホテルのロビーで待ち合わせることにした。

当日、私は緊張していた。あの頃、二人とも十代だった。それから二十数年の間に、Y君がものすごく変わっていたらどうしよう。まさか、わからないなんてことはないよな。特に心配なことがあった。Y君は当時か

らおでこが広がったのだ。もしも、髪が薄くなっていたら……。その場合、最初が肝心だ。会った瞬間に「おつ、髪、いったなあ!」と明るく云おう、と決意する。そのフレーズを心の中で唱えながら、待ち合わせの場所に向かう。あ、いた! 変わってない! 髪ある! 懐かしさと嬉しさがこみ上げてきて、言葉が出なかった。

Y君とは、それから定期的に会っている。大人になってから知り合った友だちとは、何かが違う。会うたびに、あの頃の札幌の空気を思い出す。青春の証人がいるって嬉しいことだ。



穂村 弘
(ほむらひろし)
歌人

1962年札幌市生まれ。著書に『シンジケート』『手紙魔まみ、夏の引越し(ウサギ連れ)』『世界音痴』『本当はちがうんだ日記』『によっ記』『絶叫委員会』『君がいない夜のごはん』『蚊がいる』他。ほむらひろし名義による絵本翻訳も多数。2008年より日経新聞歌壇選者。『短歌の友人』で第19回伊藤整文学賞、「楽しい一日」で第44回短歌研究賞を受賞。近刊に絵本『X字架』(絵・宇野亜喜良)、エッセイ集『鳥肌』がある。

※次号のエッセイも穂村弘さんが担当します

アートゼミ事業

●五反田団^{バイオン}「pion」

—異才の劇作家・前田司郎率いる五反田団が、満を持して札幌初登場—

作・演出 前田 司郎
出 演 鮎川 桃果 黒田 大輔 前田 司郎

日時：平成28年9月24日（土）19：00開演
9月25日（日）14：00開演

（開場は各回開演の30分前）

会場：扇谷記念スタジオシアターZOO
（札幌市中央区南11条西1丁目3-17
ファミリー中島公園 地下1階）

入場料：一般 前売3,000円 当日3,500円
学生 前売2,000円 当日2,500円

問い合わせ：（公財）北海道文化財団
☎011-272-0501



前田 司郎



鮎川 桃果



黒田 大輔

アートシアター鑑賞事業

●吉田つぶら&カンパニー～TAP Emotion～

○名寄公演

日時：平成28年9月25日（日）18：30開演（18：00開場）

会場：ふうれん地域交流センター
（名寄市風連町本町63）

問い合わせ：風連商工会 ☎01655-3-2077

●落語パラダイス

○豊頃公演

日時：平成28年10月17日（月）18：30開演（18：00開場）

会場：豊頃町える夢館（豊頃町茂岩本町166）

問い合わせ：豊頃町教育委員会（豊頃町える夢館内）

☎015-579-5801

○稚内公演

日時：平成28年10月18日（火）18：30開演（18：00開場）

会場：稚内総合文化センター（稚内市中央3丁目）

問い合わせ：

稚内市文化事業振興協議会事務局（稚内市教育委員会内）

☎0162-23-6056

●渡辺美里 北海道Special Live 2016

○清里公演

日時：平成28年10月17日（月）19：00開演（18：30開場）

会場：清里町生涯学習総合センター（清里町羽衣町35）

問い合わせ：清里町教育委員会 ☎0152-25-2005

○名寄公演

日時：平成28年10月19日（水）19：00開演（18：30開場）

会場：名寄市民文化センター（名寄市西13条南4丁目2）

問い合わせ：EN-RAYホールチケットセンター

☎01654-3-3333

○和寒公演

日時：平成28年10月21日（金）18：30開演（18：00開場）

会場：和寒町公民館（和寒町字北町61）

問い合わせ：和寒町公民館 ☎0165-32-2477

○滝川公演

日時：平成28年10月23日（日）18：00開演（17：30開場）

会場：たきかわ文化センター（滝川市新町3丁目6-44）

問い合わせ：たきかわ文化センター ☎0125-23-1281

○音更公演

日時：平成28年10月25日（火）19：00開演（18：30開場）

会場：音更町文化センター（音更町木野西通15丁目8）

問い合わせ：音更町文化センター ☎0155-31-5215

●栗コーダーカルテット&ビューティフル
ハミングバードコンサート

○標津公演

日時：平成28年10月29日（土）13：30開演（13：00開場）

会場：標津町生涯学習センター（標津町南1条西5丁目5-3）

問い合わせ：

標津町文化協会（標津町生涯学習センター内）

☎0153-82-2900

※各公演の入場料は直接お問い合わせください。

北海道文化財団アートスペース

長原實メモリアル～「ものづくり」の未来を追い
求めた不屈の家具職人～

家具職人、故長原實氏が手がけた作品や遺された資料から、「ものづくり」にその生涯を捧げた歩みを辿ります。

会期：平成28年7月4日（月）～8月26日（金）

9：00～17：00（最終日16：00まで）

休館日：土・日・祝日 ※都合により臨時休館する場合があります。

会場：北海道文化財団アートスペース

（札幌市中央区大通西5丁目11 大五ビル3F）

入場料：無料

北海道舞台塾事業

●北海道戯曲賞 作品募集

全国に門戸を開き、次代を担う劇作家や優れた作品を発掘し、北海道における演劇創作活動の活性化を図るため、戯曲作品を募集します。

応募締切：平成28年9月2日（金）必着

応募方法：北海道舞台塾ホームページをご覧ください。

<http://hokkaido-butaijyuku.jp>

問い合わせ：北海道舞台塾実行委員会（北海道文化財団内）

☎011-272-0501